

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320043

研究課題名（和文） コミュニケーションがつなぐ人とモノ：真の能動的鑑賞者育成プログラムの実践的検証

研究課題名（英文） Communication Mediates People and an Object : pragmatic verification for an authentic "active museum viewer development program"

研究代表者

福 のり子 (FUKU NORIKO)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：10411307

研究成果の概要（和文）：

ヒトとモノはどのように出会い、コミュニケーションをとるか。京都造形芸術大学で行われている鑑賞教育プログラム（ACOP）、及び京都大学総合博物館での鑑賞教育活動を基盤として、他の事例との比較検証、実践事例のさらなる蓄積、そして評価指標の確立を行った。ヒトが鑑賞を通して「飛躍的な理解」に到達するには、他者の存在・関与が極めて大きいと結論付けた。また、ヒトとヒトをつなぐコミュニケーションにおいては、応答、つまり「聴く」という行為の重要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Communication Mediates People and Objects: Pragmatic Verification for an Authentic "Active Museum Viewer Development Program"

How does a person encounter objects and communicate with them? This research project is based on the Art Communication Project (ACOP) at Kyoto University of Art and Design, working in cooperation with the Kyoto University Museum. For the project, we conducted comparative studies with other related research, accumulated pragmatic data, and established evaluative indicators for this research theme. As a result, we concluded that in order to reach a "significant understanding" of the object, the involvement of other viewers in the process is essential. We also revealed that the quality of communication among people rests on the act of listening more than that of talking.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2011年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
年度			
総計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：アート、コミュニケーション、聴く、観察力、セルフ・エデュケーション
ワークショップ、対人援助、美術館・博物館

1. 研究開始当初の背景

(1)

人がモノを「みる」とはどういうことか。
本研究は、アート（美術館）とサイエンス（博

博物館)という異なる分野で追究してきた鑑賞プログラムが、本質的な共通性を有するという発見から立ち上がった。つまり、「能動的にみる」、「自分で解釈を考える」、そしてそれを「他者に伝え合う」という相互コミュニケーションのサイクルがあり、鑑賞者は一方的な知識教授型の解説では決して得られない飛躍的な作品理解の深化に至るといえる点である。

本研究は、全く独立する両プログラムの比較・検討を軸に、その有効性の根源と発展可能性を検証するものである。

(2)

鑑賞については、教育学的研究が進み、近年も基盤的研究が複数進められている。これらに共通するのは鑑賞体験での対話の導入と、鑑賞者の主体性の確立である。本研究もコミュニケーションの介在による鑑賞者の変化を主要テーマとするが、方法論の「開発」に留まらない科学的／理論的検証と、次代を担う人材の養成に重点を置いた。また、博物館学は個々のプログラムの開発・検証が中心であり、経験知の一般化・普遍化は教育学に比べ遅れていた。本研究ではコミュニケーションという共通項を美術館・博物館両方の鑑賞に設定し、共通の指標の作成を目指した。

2. 研究の目的

本研究の最大の関心は、ヒトとモノはどのように出会い、コミュニケーションをとるか、その実践事例の蓄積と評価指標の確立であった。日本の博物館、美術館での鑑賞教育の実践・研究は10年ほど前から本格的に始められたとはいえ、まだ発展途上である。また、心理学・情報学をも横断し、なおかつ博物館と美術館双方にまたがる研究は存在しない。そのため、コミュニケーションを共通項にした鑑賞体験の検証を行う本研究の成果は、今後、動物園などその他の学習施設への応用も期待できると考えた。

さらに、本研究は鑑賞におけるコミュニケーションの「質」、すなわち鑑賞者の能動的な対話の重要性を検証することを目的とした。加えて本研究では、各研究担当が全国の博物館・美術館、小・中学校をはじめとする社会教育機関とのネットワークを活用し、その研究成果をすみやかに各教育機関と共有することを目指した。

そして、博物館・美術館が全ての人々にとって知的な出会いと学びの喜びに満ちた空間となり、その社会的価値をさらに高めることに資することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では上記の目的を達成するため、

- ・鑑賞プログラムの検証
- ・鑑賞体験の観察・分析
- ・上記の質的検証

という段階的な3つの目標を立てた。

(1) 鑑賞プログラムの検証

鑑賞プログラムで起こる「飛躍的な理解」の実態を解明するため、情報科学の理論と心理学的手法を用いて検証した。より広範囲の鑑賞者を対象とし、よりの確かな評価を確立するために、過去に蓄積した記録も活用。

・分析過程：

- ①データ構造化＝KJ法により各事例中の対話を分析。段階ごとに区切り、アイテム化する。
- ②アイテム観察＝アイテム毎に応答の手ごたえ、全体の発言量、鑑賞者個々の発言量の変化、発問-応答のマッチング回数、ざわつき加減(ノイズ量測定)を変数化。
- ③②をもとに、継続的な事例を経験した鑑賞者の反応の変化を観察(ビデオ記録の活用)。
- ④①～③をもとに、プロセス評価の方式を作成。分析では重回帰相関・ロジスティック回帰分析・パス解析等の統計的処理を実施。

(2) 鑑賞体験の観察・分析

博物館／美術館等にて鑑賞WSを実施し、その様子を記録。(1)の検証により確立した評価方式に従い分析を実施。記録はビデオ撮影を中心とし、鑑賞活動中は鑑賞者とナビゲイターをそれぞれ別のカメラで撮影し、コミュニケーションの相関性を確認。事前事後のインタビュー、半構造化面接も両者に行った。当初計画では研究初年度に評価方式を試験的に運用し、その検証-改善を実施。以降の研究期間中の実践では、鑑賞者とナビゲイターへの半構造化面接によるインタビューも行い、質的解析に必要な資料収集をさらに進めることとしていた。

(3) 基盤的实践の研究

上記(1)(2)の研究過程において、本研究が対象とする対話型鑑賞の、美術館における実践の先駆的事例であるVTS(Visual Thinking Strategies)の取り組みについての知見を多く得た。そこで、このVTS開発の中心的人物であるフィリップ・ヤノウイン氏を招聘。同氏とVTSやACOPといったいわゆる対話型鑑賞プログラムの背景となる心理学的・教育学的理论、とくに段階的発達に関する理論についての議論、比較検証を行った。

(4) 上記の質的検証

上記(3)の研究活動を当初計画に追加したことにより、鑑賞者が対象(アート作品)をみる際の思考の美的発達段階を測る「美的発達インタビュー(ADI)」についてその手法と過去の蓄積事例の全容を明らかにした。この成果と、(1)(2)の研究の成果を元として、これまでの実践事例の質的検証を行った。

4. 研究成果

本研究により、当初の目的どおりこれまで教育学に偏っていた鑑賞に関する知見を心理学・情報学などの分野に広めることができた。その過程において、とくに認知科学・学習科学と鑑賞・コミュニケーションの接点を見出すこととなり、本研究は「学習」という当初は有していなかった視座を得ることができた。

具体的には、2010年度より協同研究を行ったフィリップ・ヤノウィン氏から得た知見として、鑑賞者が対象(アート作品)をみる際の思考の美的発達段階を測る「美的発達インタビュー(ADI)」と、鑑賞者の批判的思考力を記述サンプルから分析する「コーディング」手法について明らかにした。また、学習の発達段階は直線的な「成長」というよりも階段状の「蓄積」であり、「変化」とあるという発達心理学の知見を得た。これらを接続したことで、例えば「子ども向け」「大人向け」と単純に年齢や学齢で切り分けてきた鑑賞学習設計の限界を示唆し、今後の鑑賞プログラムへの応用など社会的意義を期待できるものとなった。

また、一貫して博物館が扱う資料との対話を追究してきた京都大学総合博物館大野・塩瀬のグループは、古地図、レントゲン写真といった他分野の観察対象を用いた鑑賞ワークショップを実践、検証を重ねた。最終年度には物理のブラウン運動をとらえた資料映像でのワークショップを京都造形芸術大学北野と共同で開発。対象(モノ)が映像であっても対話を通した批判的鑑賞が可能であることを証明した。また、「宇宙箱舟」WSではいわゆる「科学的に答えの出ない問い」を通した学習プログラムの検証をも行った。

甲南大学の羽下は、応用領域として検証の準備を進めてきた児童擁護施設での実践事例をさらに蓄積した。その知見は上記の京都造形芸術大学でのヤノウィン氏との共同研究にも活用された。

これらの研究の総括として、ヒトがモノを鑑賞を通して「飛躍的な理解」に到達するには、さらに他のヒトの存在・関与が極めて大きいと結論付けた。また、それらをつなぐコミュニケーションは単なる発話ではなく、応答、すなわち「聴く」ことの質により大きく

変化すると分かった。この「聴く」ことの研究が、今後の本分野の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

(1) 福のり子、感じること 感じたあとのこと、京都造形芸術大学芸術教育研究センター子ども芸術大学活動報告書、査読無、6巻、2011、pp. 56-57

(2) 大野照文、大学博物館と子どもの学び、博物館学研究、査読無、2011、pp. 4-5

(3) 白井哲哉、水町衣里、加納圭、黒川絃美、仲矢史雄、元木環、塩瀬隆之、原発をめぐる情報伝達に関する意見交換会から得られたコミュニケーションギャップ、科学技術コミュニケーション、査読有、9巻、2011、pp. 107-119

(4) 羽下大信、コミュニティとしての学校・地域の中の学校、臨床心理学、査読無、増刊3巻、2011、pp. 190-194

〔学会発表〕(計7件)

(1) Eri Mizumachi, Hiroaki Isobe, Mari Kamitani, Hiromi Kurokawa, Takayuki Shiose, Yoshinobu Douno, Naoko Mori、Development of Hands-on Activities for Teaching biodiversity and cultural diversity: “Space Ark Workshop”、東アジア生態学会連合第5回大会、2012年3月20日、龍谷大学瀬田キャンパス

(2) 水町衣里・磯部洋明・神谷麻梨・黒川絃美・塩瀬隆之・堂野能伸・森奈保子、答えのない課題を扱う教育プログラムの開発: 『宇宙箱舟ワークショップ』を事例に、日本科学教育学会第35回年会、2011年8月23日、東京工業大学すずかけ台キャンパス

(3) 塩瀬隆之・水町衣里・磯部洋明・黒川絃美・堂野能伸・神谷麻梨、地域連携によるワークショップ開発—評価サイクルに関する研究、2011年度大学博物館等協議会・博物科学会、2011年6月23日、名古屋大学

(4) 周藤沙月・角康之・塩瀬隆之、博物館展示説明における身体配置の影響、INTERACTION2011、2011年3月10日、日本科学未来館

(5) 塩瀬隆之、毎日ワクワクする博物館をつくろう!～教えない博物館をめざして～、平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業子どもが主役の博物館づくり事業研究フォーラム「子どもが主役となる博物館づくりを考える」(招待講演)、2011 年 1 月 15 日、三重県総合文化センター

(6) 福のり子、ACOP、日本ミュージアム・マネジメント学会 (招待講演)、2010 年 11 月 1 日、国立新美術館

(7) 塩瀬隆之・水町衣里・戸田健太郎・元木 環・永田奈緒美、学際融合のための技術史展示：2010 年企画展「科学技術X の謎」を例に、大学博物館等協議会 2010 年度大会・第 5 回博物科学会、2010 年 6 月 25 日、東北大学

[図書] (計 3 件)

(1) 福のり子 (責任編集)、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター、2010 年度アート・コミュニケーションプロジェクト報告書、2011、192 ページ

(2) 塩瀬隆之・水町衣里・戸田健太郎・元木 環、化学同人、科学技術Xの謎、2010、88 ページ

(3) 福のり子 (責任編集)、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター、2009 年度アート・コミュニケーションプロジェクト報告書、2010、212 ページ

[その他]

ホームページ等

<http://www.acop.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福 のり子 (FUKU NORIKO)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：10411307

(2) 研究分担者

大野 照文 (OHNO TERUFUMI)
京都大学・総合博物館・教授
研究者番号：40194245

羽下 大信 (HAGE DAISHIN)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：20117021

塩瀬 隆之 (SHIOSE TAKAYUKI)
京都大学・総合博物館・准教授
研究者番号：90332759